

6月8日 檸檬

高校2年生の時だったか。夏休みに読書感想文の宿題が出た。読書が大嫌いだった(というか、目的を課されて読むということが嫌いだった)私は、課題図書の中で一番分量が少なかった、梶井基次郎の『檸檬』を選んだ。

が、失敗だった。何度読み返してもさっぱり意味がわからない。授業で習った『山月記』も、李徴が虎になるというところで脳が閉じてしまった私だが、檸檬の紡錘形や冷たさに心引かれる主人公の気持ちには全く共感できなかった。果物屋や丸善の独特の雰囲気。積み重ねたすべてを破壊したいという衝動。ノスタルジックという感慨すら持たない高校生に理解できなかったのは、無理もないことだと思う。結果、巻末の解説を読んで、それをあらすじに付け足すという荒技で、なんとか感想文を仕上げることができた。

優れた小説は、読み返すたびに、読者の年齢や経験に応じて、深みを増してくる。檸檬の冷たさやその形の美しさを言葉で論理的に説明することは不可能だ。「ああ、わかる」、「先生が授業の中で説明していたのはこれか」という感覚を10年、20年たってから実感できるというすごみ。これが文学の力だと思う。

